

敗戦後の日本の都市空間はどう描かれたか —当時の新聞記事見出しを資料として—

吉田 容子

(奈良女子大学)

はじめに

奈良女子大学研究院人文科学系教員の吉田容子です。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。発表を始める前に、一つお断りがあります。本発表で取り上げる敗戦後、ここでは主に1950年代になりますが、その当時の社会状況を把握するうえで、現在では差別的だとして使われない言葉が多数出てきますことを、どうぞご了解ください。

私の専門は地理学、とりわけ人文地理学です。本日のシンポジウムテーマ「都市空間とジェンダー—身体表象と記憶をめぐる—」にある「都市空間」の空間 space とは、地理学にとって非常に重要な概念です。したがって、まずは空間についての説明から始めたいと思います。

元来、space とは物理的空間を指し、それには二つの属性があります。一つは、ユークリッド幾何学によって定義される、無限に連続する等方的な三次元の広がりをもつ絶対空間で、もう一つは、実在するものの位置や二つ以上のものの位置関係を距離として把握する相対空間です。こうした属性をもつ物理的空間は、「自明」の疑いようもないものとされてきました。それが、1980年代の英語圏において、地理学以外の社会科学の周辺領域で「空間論的転回 spatial turn」が生じます。これは、それまで空間を扱う専門分野は「空間の科学」を標榜する地理学くらいだったのですが、都市社会学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズなどにおいて、現代の都市や社会の構造、またその構造を貫く論理を、空間という観点からも捉えようとする試みでした。地理学の隣接分野で生じた空間論的転回は、空間の関係論的理解の重要性を地理学者にあらためて強く認識させることになったわけです。

空間の関係論的理解とは、空間を従来自明視されてきた物理的なものとして捉えるだけでなく、政治的・経済的・社会的・文化的関係の産物として構築され・生産されるもの、つまり社会的経験の産物（社会的構築物）として捉えることです。ただし、ここでの「生産」とは、社会的人間が自らの生活や精神、歴史や世界、意識、表象を生み出すことを示す広い意味で捉えたものです。こうした空間の捉え方は、フランスのマルクス主義社会学者であり哲学者としても知られるアンリ・ルフェーブルや、イギリスの地理学者ドリーン・マッシーをはじめ、多数の研究者によって提示されています。たとえば、ルフェーブル（[1974] 1991）は、「空間的实践」（日常生活の領域で認められるもので、建造環境や風景の中で具現化されるもの。知覚された空間）、「空間の表象」（国家や都市計画を通じた、たとえばわかりやすく言うと、官僚や科学者による支配的な空間。思考される空間）、「表象の空間」（人々の日常生活として直接に生きられる空間 lived space）、という3つの次元を示し、これらの次元が相互に空間をつくりあげる、すなわち空間化の過程が空間の生産であると述べています。

このように、空間とは、社会や私たちを入れる単なる容器ではないのです。空間の関係論的

理解にのっとれば、空間内においては多様な行為主体の間で関係性が紡ぎ出されることから、空間とは権力が作用する場として捉えることができるでしょう。したがって、空間がどのようにつくり出され・どのような意味を与えられるのか、空間をだれが占拠し・そしていかに占拠するのか、権力作用の場としての空間の解明が必要となってきます。また、空間は、グローバル世界、国家、都市、地域コミュニティ、家庭、身体というように、多様なスケールで理解することができます。空間の最小単位とされる身体は、まさに権力作用の場なのです。

こうした空間概念を踏まえれば、先に紹介したルフェーブルが述べた「空間にはらまれた社会的諸関係を暴き出す作業」は、人文地理学とりわけ社会地理学の主課題といえましょう。そこで本発表では、敗戦後の日本への連合国軍進駐、さらに対日講和条約発効後の朝鮮戦争時における国連軍駐留や、その後の米国による沖縄統治などを背景に軍隊・基地周辺にみられた歓楽街という空間について、どのような権力・人々が、どのような関係にあったかを分析・考察していきたいと思います。

研究対象および方法

研究対象は、連合国軍進駐および国連軍駐留の軍隊・基地拠点地域のうち、発表者がこれまで調査を行ってきた、とくに広島県呉市、山口県岩国市、沖縄県（那覇市と沖縄市）で、敗戦以降、当該諸地域で発行された新聞に掲載された記事の大見出しおよび小見出しを分析しました。この分析から、軍隊・基地周辺の歓楽街や、歓楽街をめぐる多様な人々がどのように描かれたか・表象されたかを考察し、敗戦後の日本の都市空間がどう描かれたかを明らかにしていきます。

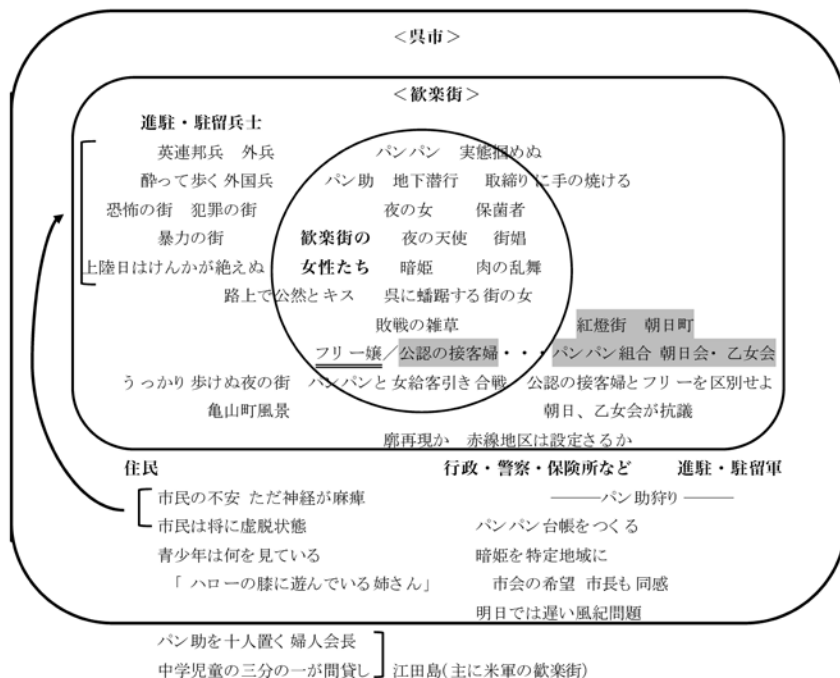
新聞はさまざまな情報を提供する媒体ですが、けっして中立な立場を取っているわけではありません。とくに当時は、戦勝国への不満・批判をあからさまに記事にできなかったこと、また、人権配慮の意識が薄かったことなどから、記事には多くの偏向がみられ、そこに描かれた人々はある種のイメージでパターン化され表象されたと言えるでしょう。それゆえ、敗戦後の一時期の社会背景や人々の社会意識を知る上で、新聞記事は有効な資料になると考えます。

では、具体的にみていきます。作業手順はまず、1950年代を中心に、歓楽街をめぐるおもな行為主体（具体的には、歓楽街の女性、進駐軍・駐留軍の兵士、地域住民、行政・警察・保健所など）に関連した新聞記事の大見出し・小見出しを抜き出し年表として整理し¹⁾、研究対象地域における当時の状況を把握しました。しかし、年表だけでは歓楽街をめぐる行為主体間の関係性がうまく掴めないのが、大見出し・小見出しにあるワードを行為主体別に整理しました²⁾。

図1は、広島県呉市内の歓楽街に関連する記事見出しを、行為主体別に整理したものです。新聞記事は「中国日報」を使用しています。本日は詳しく紹介する時間がなく、一部についてご説明するのみでお許しください。呉市には、明治22(1889)年に大日本帝国海軍の鎮守府が置かれました。終戦後、進駐軍は一部焼け残った鎮守府施設を接収し、復興業務を行うための拠点としました。終戦直後には米軍が進駐しましたが、数ヶ月で英連邦空軍(英・豪・インド・ニュージ

1 本発表記録では、紙面の都合により年表を割愛した。

2 本発表記録では、新聞の記事見出しに使用されたワードを<>で示した。



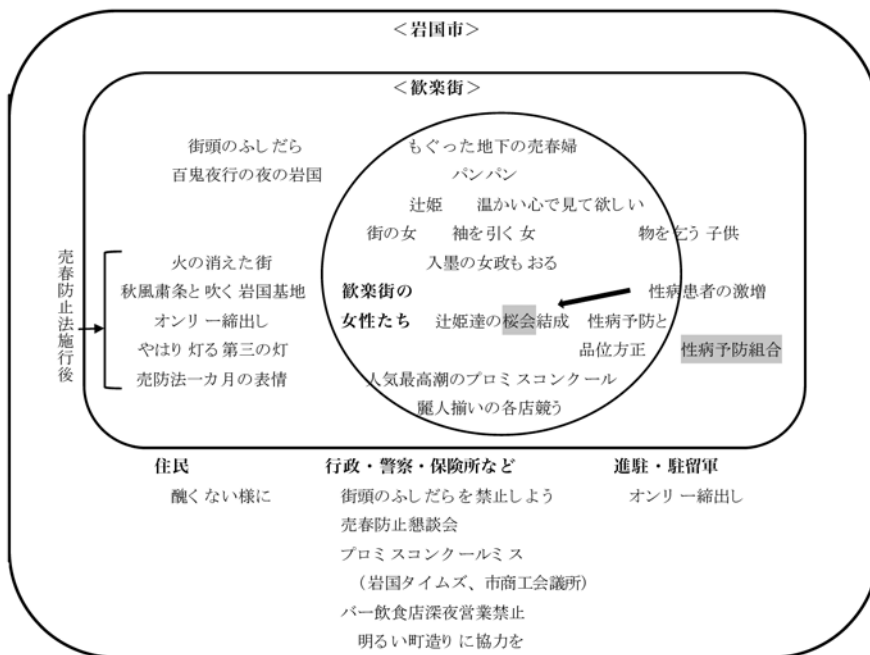


図2 山口県岩国市内の歓楽街に関連する記事見出し

では、売春女性たちによって桜会という組合が結成されました。女性たちは当時月 100 円の組合費を自費負担して定期的に検診を受け、性病に罹患していなければ組合員バッジをつけて仕事をすることができました。兵士が街中で胸元にバッジをつけた女性を見つければ安心して買春できるというしくみで、バッジを目安とする方法は、岩国に限らず他の都市でもしばしば採用されていたことです。また、今日では安易に想像しにくいことですが、主に日本人を顧客（米兵相手の店は別に存在）とするバーやキャバレーで働く（ときに売春も行う）女性たちのプロミスコンクールが地元新聞社の主催で行われていました。風俗営業に対してある種寛容な空気があったことが窺い知れます。

沖縄県内のとくに那覇市や旧コザ市（現在の沖縄市）についても、県内 2 大新聞である「沖縄タイムス」と「琉球新報」をもとに歓楽街に関連する記事見出しから年表を作成し⁴⁾、さらに行為主体間の関係性を把握するために、記事見出しにあるワードを行為主体別に整理しました(図 3)。沖縄県は、みなさんご周知のとおり、敗戦から 1972 年まで、米国の統治下に置かれました。したがって、売春政策に関しては長らく米国が主導するかたちであり、歓楽街の統治・統制の仕方として「A サイン」制度が用いられていました。これは、所定の衛生基準を満たし、雇用女性の定期検診を遵守すれば、駐留統治米軍（USCAR：琉球列島アメリカ民政府）から、歓楽街地区への米兵の立ち入りが許可されたものです。許可を受けた業者は、A サイン組合を形成していました。

4 本発表記録では、紙面の都合により年表を割愛した。

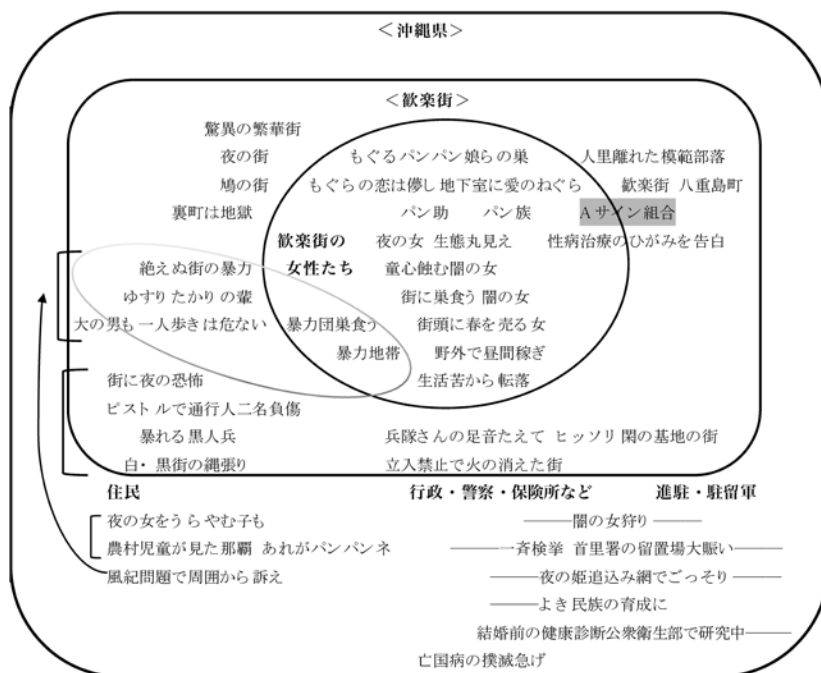


図3 沖縄県市内（とくに那覇市および旧コザ市）の歓楽街に関連する記事見出し

新聞記事から読み解く敗戦後の日本の都市空間

では、ここまでで紹介してきました、呉市、岩国市、沖縄県（那覇市と旧コザ市）に関する地元新聞記事の見出しにあるワードを、歓楽街という空間をめぐる各主体に整理して、詳しくみていくことにします（図1・2・3を参照）。

二分される歓楽街女性たち

まず、歓楽街の女性たちが記事見出しにどう書かれたのかについてです。女性たちは売春を行う者として〈街娼〉〈パンパン〉〈パン助〉〈パン族〉と呼ばれたり、〈夜の女〉〈闇の女〉というように街の暗部の象徴として、また、〈春を売る〉〈袖を引く〉〈雑草〉のように表象されました。〈辻姫〉〈夜の天使〉〈麗人〉としても表わされますが、これは言うまでもなく、姫・天使・麗人として好意的に受け入れられたわけではありません。彼女たちを侮蔑・揶揄し否定する、悪意に満ちた言葉が新聞紙上に並んだといえます。売春街を含んだ歓楽街で働く女性たちは、〈フリー嬢〉／〈公認の接客婦〉に二分されていました。つまり、組合に属して性病検診を定期的に受けている「公認」の女性と、他方、検診の保証のない女性とに大別されたわけです。二つに分けられた女性たちには、空間的にも異なる活動範囲をもっていました。たとえば、呉市の場合、〈フリー嬢〉は亀山町を、「公認」の〈パンパン組合〉である朝日会や乙女会に所属する女性たちは朝日町周辺を、それぞれ拠点としていたわけです。話が少し横道にそれますが、興味深いことに、「公認」の女性たちの組合の名称である乙女会（呉）や桜会（岩国）は、名付けの巧みなレトリックによって、純真無垢なイメージを想起させます。

歓楽街女性たちの「すみわけ」

先ほどから紹介しています呉市内の＜パンパン組合＞である乙女会や朝日会では、組合傘下の売春業者が市内中心部の商業地区から少し距離を置いたところに売春宿(ハウスとも呼ばれた)を置き、そこが女性たちの商売(売春)の拠点となっていました。こうした集娼地区が当時多く確認されたなかで、呉には、特定の地区に限定しない散娼の営業形態を取った売春女性たちによる団体で白鳥会というのがありました(彼女たちの多くは定期的に検診を受けています)。彼女たちに、住处としての、また商売(売春)のさいの部屋を貸す業者はいましたが、特定の業者が彼女たちを組織的に束ねていたわけではないようです。散娼の営業形態を取っていた女性たちの活動範囲を空間的領域として示すのは適切でないかもしれませんが、呉港側に位置する駐留地から市内中心部に遊びにやって来る兵士が乙女会や朝日会傘下の売春宿に辿り着くその手前で、白鳥会の女性たちが兵士を客として捕まえたといえます。また、呉駅ガード下を活動拠点としていたのは、業者や組合に属さない街娼 street girl と呼ばれた女性たちで、彼女たちの大半は定期的な検診は受けていなかったようです。ですから、街娼たちは常に警察の取り締まり対象となっていました。不特定多数の兵士を相手にした女性たちの一方で、決まった相手がいるオンリーと呼ばれた女性は、相手の米兵から呉市郊外の空襲で焼け残った住宅を与えられて住んでいました。このように、呉市の都市空間には目に見えない線引きがあり、女性たちの「すみわけ」がなされていたと言えるでしょう。

沖縄の場合、当時の旧コザ(現沖縄市)では、＜人里離れた＞八重島集落にいち早く売春街がつくられ、米兵との売買春の範囲がここに限定されました。売買春の範囲を指定するのは、「性の防波堤」をつくって「一般」の婦女子を守るという地元行政の強い主張や、売春に関わる女性や彼女たちの雇用業者を特定の空間に囲って兵士への性病感染・蔓延を防ぐという米軍の要望であり、指定された範囲の外では警察(沖縄の場合 MP: military police も加わって)による＜闇の女狩り＞が毎晩のように行われました。

また、沖縄の金武町(旧金武村、沖縄県本島ほぼ中央部に位置)についても、女性たちの「すみわけ」をみてみましょう。旧金武村では、1962年に米軍基地キャンプ・ハンセンの建設が完了しますが、その建設段階から、基地第1ゲートのすぐ南側に米兵目当ての店舗が集まるようになり、金武特飲街と呼ばれる歓楽街が登場しました。ここは戦前に荒地で、人家もなかったところです。歓楽街エリアの南縁部は急な崖になっていて、歓楽街の南側に従来からある集落とは完全に切り離されたかたちで歓楽街の立地が可能となりました。各店舗がAサインの基準(おもに、店の衛生と働く女性の検診)を満たせば、米兵はバーやキャバレー、ホテル、飲食店などの利用とそこで働く女性を買春することができました。第1ゲートから東方に第2ゲートがあり、このゲート前にも米兵を顧客とする並里特飲街が設けられました(しかし、金武特飲街の方が店舗数が多く、並里特飲街は短期間のうちに勢いを失いました)。注目すべきは、牛納バー街と呼ばれた、地元金武や周辺集落の男性客を相手にする歓楽街です。牛納バーは、先の2か所の特飲街の間に位置していましたが、ここの各店舗はAサイン店として米軍から許可されていなかったため、米兵の利用は(表向き)なかったところです。このように、米兵と地元男性との間で、利用できる歓楽街や相手にする女性たちが全く異なっていたということです。図4は、沖縄本島北部に位置する辺野古の米軍基地キャンプ・シュワブの近隣にあった辺野古特飲街(通称アッ



図4 沖縄県 辺野古特飲街のゲート 発表者撮影（2015年11月17日）

ブルタウン）の入口に建てられていたものです（特飲街はのちに社交街と名前を変えます）。沖縄県内でAサインの許可を受けた特飲街の入口には、このようなゲートがありました。米兵が利用できる売春街を示す、都市空間の象徴的なランドマークと言えるでしょう。

歓楽街女性たちを取り巻くさまざまな主体

次に、進駐軍兵士や、さらに講和条約後の駐留軍兵士たちが、記事見出しにどう書かれたのかみてみましょう。兵士による子どもたちへの奉仕活動（たとえばクリスマスの際の寄付）などがあった一方、＜酔って歩く外国兵＞＜上陸日はけんかが絶えぬ＞＜街に夜の恐怖＞といったように、彼らは往々にしてよからぬ存在として描かれています。また、＜暴れる黒人＞＜白・黒の縄張り＞の記事見出しから、米本国でのレイシズムがそのまま日本へも持ち込まれ、歓楽街において白人兵士と黒人兵士との縄張り争いが生じていたことがわかります。横行する兵士たちに加え、＜ゆすりたかりの輩＞＜大の大人も一人歩きは危ない＞など、街の暴力団の横行も報じられました。こうした記事見出しから、歓楽街という空間がはらむ暴力性の問題が浮かび上がってきます。

売春女性、兵士、暴力団の存在が都市空間の社会的秩序を乱すとされ、それに対する管理・統制として、駐留軍からの強い要請で行政、警察、保健所が動いていたわけです。＜パン助狩り＞＜闇の女狩り＞＜追い込み網でごっそり＞というように、「公認」でない売春女性は警察当局から「狩られる」対象です。保健所も加わり、売春女性の登録簿＜パンパン台帳＞が作成されていました。さらに、＜よき民族の育成＞のため、当時＜亡国病＞といわれた性病の撲滅を掲げ、「一般」の男女に結婚前の健康診断を奨励しています。これなどは優生思想を彷彿させるものです。こうした取締まりを強化した背景には進駐軍・駐留軍の存在があり、兵士への性病罹患防止を目的に、MPが警察に協力して「公認」でない売春女性の狩り込みが毎晩行われていました。

では、地域の住民、とくに気になるのは当時の子どもたちですが、戦後のこうした状況をどのように見ていたのでしょうか。＜あれがパンパン＞＜ハロー（米兵のこと）の膝に遊んでいる姉さん＞というように、歓楽街の女性を冷ややかに見ていた子どもたちがいた一方で、＜夜の女をうらやむ子も＞いたわけです。派手な洋服で街中を闊歩する彼女たちが、まるで戦後の「勝ち組」

に見えたのでしょうか。売春女性たちは、故郷を離れてより多くの稼ぎが見込める駐留地から駐留地へと移動していました。歓楽街周辺の民家の多くは、彼女たちに離れや母屋までも貸し、その家賃収入を家計の足しにしていました。記事見出しの〈パン助を十人置く婦人会長〉の10人とは、いささか誇張気味と思われるかもしれませんが、実際、納屋をいくつも持った農家では大勢の女性に部屋を貸し、女性たちはそこに兵士を連れ込み商売をしたため、子どもに与える影響が心配されていました。しかしながら、地域経済を潤す部屋貸しは一向に減らず、兵士相手の女性の存在は「必要悪」と考えられていたのです。

小括

本報告の目的は、軍隊・基地周辺にみられた歓楽街という空間について、どのような権力を持った人々が、どのような関係にあったか、新聞記事の見出しを分析・考察し、敗戦後の日本の都市空間がどう描かれたか明らかにすることでした。敗戦後日本の都市空間は、戦勝・支配／敗戦・従属の権力関係が表出した場です。それは、国家のレベルのみならず、さまざまな主体の間に発生する力関係の表出をともなったものです。戦勝／敗戦の結果は、都市空間に複雑で重層的な権力関係を生み出しました。ミシェル・フーコー（[1975] 1977）が、身体は権力の対象ならびに標的として発見されたと述べていますが、このことから、身体とは権力の作用を受け、権力構造の中に置かれるものと捉えることができ、今回の新聞記事見出し分析から、とりわけ売春女性の身体には戦勝国側の権力が否応なく残忍に行使されたことは明らかです。

おわりに

地理学の立場から都市空間を捉えての報告だったため、本日まで発表されたお二人とは違った切り口になり、身体や表象についてもうまく言及できなかった点をお詫びします。今後は、身体と権力の問題をさらに追究していく予定です。なぜなら、女性の身体は、どの時代においても政治的抗争の場として利用され、搾取されてきたからです。身体をめぐるジェンダーやセクシュアリティの観点から見極める必要があります。以上を持ちまして、私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- Michel, F. ([1975] 1977) *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Éditions Gallimard. (ミッシェル, F., 田村俣訳, 1977, 『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社.)
- Lefebvre, H. ([1974] 1991) *The production of space*. Blackwell. (ルフェーブル, H., 斎藤日出治訳, 2000, 『空間の生産』青木書店.)